

## 第103回 三方限古典塾（'15.5.21）

### 洪 自誠（1561～1616）「菜根譚」（その3 -20）

1 冷眼<sup>れいがん</sup>もて人を観<sup>み</sup>、冷耳<sup>れいじ</sup>もて語<sup>ご</sup>を聞き、冷情<sup>れいじよう</sup>もて感<sup>かん</sup>に当り、冷心<sup>れいしん</sup>もて理<sup>り</sup>を思う。

前集 204

（意識） 冷静な眼で人物を観察し、冷静な耳で人の言うことを聞き、冷静な感情で事柄に対応し、冷静な心で道理を考えるようにする。

（余説） 冷静な感情で物事に接し、冷静な心で物事を考えるのは当然の道理です。しかし、冷眼・冷耳・冷情・冷心という言葉には些か引っ掛かります。もっともこれがビジネスの世界の話ならば納得もできますが。本文の趣旨とは異なりますが、やはり人と接する際には、事のいかんを問わず、温かい気持ちと寛容さを忘れないように心がけたいものです。

中国・三国時代の魏の思想家で老荘の学を好んだ【阮籍】<sup>げんせき</sup>（210～263）は、好感のもてる人は青眼で喜んで迎え、嫌な人には白眼で冷たく迎えたという故事があり、そこから冷たい目つきで見たり、冷たく扱ったりすることを「白眼視」という言葉が生まれています。竹林の七賢の一人ですが、酒を好み、礼法を無視したと伝わっています。

（参考）晋書・阮籍伝「籍、また能く青白眼を為す」

2 仁人<sup>じんじん</sup>は心地寛舒<sup>しんちかんじよ</sup>なれば、便<sup>すなわ</sup>ち福厚<sup>ふくこう</sup>くして慶長<sup>けい</sup>く、事々<sup>じじ</sup>に個<sup>かんじよ</sup>の寛舒<sup>かんじよ</sup>の氣象<sup>けいさう</sup>を成<sup>な</sup>す。鄙夫<sup>ひふ</sup>は念頭<sup>ねんとう</sup>迫促<sup>はくそく</sup>なれば、便<sup>すなわ</sup>ち禄薄<sup>ろくはく</sup>くして沢短<sup>たくたん</sup>く、事々<sup>じじ</sup>に個<sup>かんじよ</sup>の迫促<sup>はくそく</sup>の規模<sup>きぼ</sup>を得<sup>え</sup>。

前集 205

（意識） 心が豊かで思い遣りの心を持った人は、気持ちが伸びやかでゆったりしているので、幸せも大きく喜びも長く続き、何をするにしても余裕が現れる。

これに対して、度量が狭くて卑しい心を持った人は、万事にこせこせとしているので、幸せも薄く恵みも長続きもせず、何をするにしても忙しない雰囲気になってしまう。

（余説） 超然として安らかな気持ちでいる人には、幸せが向こうから好んで来るが、心が卑しく消極的な人には、苦しみに向こうから好んで来ますよということでしょうか。

言換えれば、幸福になりたければ、先ずは人間として徳を積んで自分をゆったりとさせることです。勿論不幸になりたければ、“こせこせ”して悩んでばかりおれば、自然と不幸になれます。翻って言えば、物事を処するには、焦らにず悠然とした気持ちで対応していると、いろいろなことに気付き、結果的に完成された人間に近づき、気が付くと幸せになっているであろうことを肝に銘じておきたいものです。

寛舒<sup>かんじよ</sup>の寛は、気持ちがゆったりとゆとりがあるさま、舒は、気持ちがのびのびとしているさまを意味し、合わせて気持ちが広く伸びやかでのんびりしていることです。

（参考）論語・雍也140 「知者楽水。仁者乐山。知者動。仁者静。知者楽。仁者壽」

（知者は水を楽しみ、仁者は山を楽しむとあり。知者は動き、仁者は静かなり。

知者は楽しみ、仁者は壽<sup>いのち</sup>ながし。） 仁者（=仁人）

松尾芭蕉 「氣にいらぬ 風もあろうに 柳かな」

六然<sup>さいぜん</sup>（崔銑） 「自処超然 処人譎然 有時斬然 無事澄然 得意澹然 失意泰然」

3 悪を聞きては、<sup>そのまま</sup>就には悪むべからず。恐らくは讒夫の怒りを洩らすことを為るならん。善を聞きては、急には親しむべからず。恐らくは奸人の身を進むるを引くならん。

前集 206

(意訳) 人の悪い評判を耳にしても、すぐに鵜呑みにしてその人を憎んではならない。なぜなら、悪意をもっている人が自分の怒りを晴らすために流す悪評かも知れないからだ。

人の良い評判を聞いても、すぐに親交を結んだりしてはならない。なぜなら、実は心のねじけた者が、自分を売り込むために流した自己PRであるかも知れないからだ。

(余説) ある人のことは、その当人しか知らない聖域があります。また、すべての話には裏があるのも一つの真実です。他人の噂話や評判、悪評、風説など何れも信用できない場合があることも当然です。火の無い所に煙が立つこともあります。そのような卑しむべき言動は自分の口からは決してなさないことも、改めて己の心に厳命しましょう。

国際問題においても、関係国の利害に直接・間接関わるような報道に対しては、その裏にあることについて、慎重な配慮が必要なことは常に念頭におくべきです。国際関係は利害関係でもあり、どの国でも自国の利益が第一です。自国が利益を得たとき、その相手国は善い国と評価され、損をすれば相手国は悪い国とされがちです。

(参考) 莊子・内篇・逍遙遊「世を<sup>こそ</sup>挙つて之れを誉むれども、勸むることを加えず。世を挙つて之れを非れども、沮むことを加えず」(毀誉褒貶に心を動かされなかった。)

4 風斜めに雨急なる<sup>ところ</sup>処は、足を立て得て定めんことを要す。花濃やかに柳艶なる<sup>めく</sup>処は、眼を着け得て高からんことを要す。路危うく<sup>こみちけわ</sup>径険しき<sup>えん</sup>処は、頭を回らし得て早からんことを要す。

前集 209

(意訳) 横なぐりの風が吹き、雨が激しく降っている時には、脚を大地にどっしりと踏みしめ安定させて堪え忍ばねばならない。花美しく柳あでやかなる場所では、それに惑わされずに、しっかりと目標を見定めねばならない。大通りでも小径でも危なく険しい場所では、迷わずにもと来た方へ引き返す必要がある。

(余説) どんな人生にも、雨の日、風の日、嵐の日があり、風穏やかな晴れの日もあります。非難中傷を浴びる真っ直中においては足をしっかりと踏みしめて堪え忍び、自分の能力を超えるものが要求され危険を感じたようなときには、引き返す勇気も必要です。わたしの拙い経験でも、物事が順調に進んでいくように感じられたときに、目標を見失って大きな陥穽が待っていたように思います。

また、車を運転していてどの路に行くか迷った時には、論語の「行くに<sup>こみち</sup>徑に由らず」を思い出します。この心掛けは人生に対しても言えることであり「大道をまっすぐ進むがいい。それがもしも回り道に見えたにしても、平らで正しいはずだ。これに反して、近道であるように見え変化の魅力をもっている、小道はやがて行きづまりがくる。」ほどの意味に解しています。

(参考) 論語・雍也 131 「行不由徑」(行くに<sup>こみち</sup>徑に由らず)

森 信 三「逆境は、神の恩寵的試練なり。越えられない試練を与える神はいない。」

松尾芭蕉「氣にいらぬ 風もあろうに 柳かな」